

# SHADOW BLUE

碧乃そら 2025年自選短歌 2025/12/27 発行

ゆづりあふ空席ひとつぽつかりと雲間から射すひかり坐りて  
祈りとは冬の月かげ縊り合はせきみのてぶくろ編み上ぐること  
梟の眼は昏き鍵穴で過ぎぬるわれが這ひ出してくる  
苺ジャム煮つむる夜はあまやかな月かげ夢のごと恋のごと  
ねえ音が淋しさうよと云ふきみのひとさし指が鳴らすB♭  
沫雪のごとくうつすり白猫は角を曲がりてかくり世へゆく  
曖昧な境界ばかりのこの都会で冬の鴉はくつきりと黒  
万光飾どこかにわれのかかへたる欠けにし星のつがひやあらむ  
街燈も目を閉づるころ冬昴かかへて眠るわれのしづけさ  
人類のゆくすゑ照らす電燈の炎のうちにある断末魔  
魚には分類されぬ生き物の骨のアーチの向かう、春の闇  
さくら貝あなたの指を思ひをりうすくひろがる嘘の浅瀬に  
散歩の犬も人間もバスも「匹」で数ふ何とたひらかなる吾子の世界  
六月は明るい色の服を着るわたしはきつと生きたいのだらう  
みづたまり涙落としてゆがめたる今宵の月をたれの名で呼ぶ  
さりさりと林檎を剥きてまひるまの月の白さに近づけてるる  
遠まはりする帰り道 花蜜柑かをりて二人の距離をくすぐる  
古木の虚に隠した鍵はなくなつてわたしの嘘はひらけないまま  
黒鍵の響きがこちよい朝の雨垂れ つまさきが冷えてるる  
あばらなる空き地に体を投げ出してまだ生きてるるまだ生きてるる  
よるべなき笹舟すくふてのひらの湊にわれも心寄せたり